
とある科学の超越移動《オーバーポイント》

黒炉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の超越移動^{オーバーポイント}

【Nコード】

N4728Y

【作者名】

黒炉

【あらすじ】

柵川中学1年D組に転入してきた仮初京哉^{かりそめきょうや}。データ皆無の京哉は身体検査を受けるが、その結果は……え！？レベル5！？突如現れた8人目のLEVEL5。あ、なんだ、第八位か……は？原石？何それ食えんの？暗部組織アイテムに目をつけられながらも、俺は普通に生活してみせる！フラグ相手随時募集中！

転校、身体検査へシステムスキャン（前書き）

どうも、黒炉です。

このたびは、閲覧ありがとうございます。

他の小説と同時進行で行きますので、不定期更新になりますが宜しくお願いします。

転校、身体検査へシステムスキャン

学園都市。人口230万人の大都市。その8割が学生という学生の街。

その学園都市にある一つの中学、柵川中学に一人の転入生がやってきた。

「彼が今日から1年D組に転入する狩初京哉君だ」

待合室で、教師が一人の少女に一人の少年を紹介する。

「宜しく願います」

「おう。宜しく」

少女の名は初春飾利。第177支部所属の「風紀委員」^{ジャッジメント}。

少年の名は狩初京哉。ついこの間学園都市に来たばかりの、能力開発を受けて間もない少年。

「あの、狩初君の能力はなんなんですか？」

「うーん、知らね。無能力者^{レベル0}とか言われたけど」

この学園都市では超能力の研究が日夜行われている。

学生たちは能力開発を受け、空間移動^{レポート}や精神感応^{テレパス}といった超能力を身につける。

これらは大きく、

無能力者 レベル0 -

低能力者 レベル 1

異能力者 レベル 2

強能力者 レベル 3 -

大能力者 レベル 4

超能力者 レベル 5

の 6 段階に分けられる。

「レベル 0 ですか？」

「詳しいことは分からない。今から身体検査システムスキャンをする」

臨時で行われることになった京哉の為の身体検査システムスキャン。学園都市としては、能力が分からない学生がいるのはあまり好ましくない。
学園都市の人間の能力は、すべて「書庫バンク」と呼ばれるデータベースに保管される。京哉の能力も、同じように記録されるのだ。

「それでは運動場へ移動してくれ」

「はいはい」と

軽い足取りで運動場へ向かう京哉。

研究所からの報告では、一応は「空間移動系の能力者」ではあるらしい。

本人は何も考えてはいなかったが。

「あゝゝ結構固まってるな」

余裕綽々といった感じで伸びをする京哉。校舎からは他の生徒が顔を出していた。

転入生がいきなり能力を見せてくれるというのだ。気にならないものはいないだろう。

「君は“原石”なのかい？」

寄ってきた教師が聞きなれない単語を口にする。

「ゲンセキ？何それ？食えんの？」

「……原石とは、学園都市の能力開発を受ける前から超能力を行使できる人間のことだ」

「あー、なるほど。じゃあ俺は原石っすね。自分の身体も飛ばせますよ」

「既にレベル4は確定か」

空間移動系能力者は自分の身体を飛ばせるようになった時点でレベル4認定される。

まず京哉の前におかれたのは100kgほどの石の塊。

「コレを可能な限り遠くまで飛ばすんだ」

「コレを？」

「出来ないか？」

京哉は首を横に振り、石に触れる。

その途端、石はヒュンと音を立てて消えた。

「…………どこに飛ばした？」

「えーと、5 k mくらい先に」

「なんだと？」

「もっと重いものでも良いですよ。そのクレーン車とか」

そう言うつと京哉はクレーン車に触れ、能力を行使する。

ヒュンと音を立ててクレーン車は消える。

そんなことを延々繰り返し、京哉の学園都市生活一日目は終わりを迎えた。

「…………あれ！？俺これしかしてないんだけど！？」

結果通知：狩初京哉（空間移動能力者）
テレポーター

最大飛距離：5893・349m

最大質量：47938・6kg

判定：LEVEL5（第八位）

……あれ？レベル5ですか？

こうして京哉の騒がしい学園都市生活は幕を開けた。

解説、身分証明へプロフィール（前書き）

アポリオンさん、感想有難う御座いました！
今回は、オリキャラ『狩初京哉』のプロフィールです。

解説、身分証明へプロフィール

名前：狩初京哉 かりそめきょうや

年齢：13歳

所属：柵川中学1年D組

身長：153cm

体重：39kg

容姿：黒髪を少し伸ばしている。中性的な顔立ちだが女性と間違えられることは少ない。

性格：基本的にひょうひょうとした軽い性格。友達思いでもあるのだが、学園都市の外では『原石』としての能力が災いしてほとんど

友達が出来なかった。自分とかかわりの無い人間に対しても冷酷である。子供が大好きで、性別問わず性格が激変する。知らない子供でも気がつけば守っちゃったりする。子供扱いされるのが大嫌いで、『ガキ』『チビ』などといった単語に敏感。必要があれば戸惑うことなく人を殺す。

能力：空間移動系の最高峰『オーバーポイント超越移動』。レベルは5。順位は第八位。

ナンバーセブンに並ぶ世界最大級の原石。

移動させたい物体に手を触れなければ移動できないなどの点は白井黒子の『レポート空間移動』と同じ。

異なる点は、物体の移動に11次元「ベクトル」を用いることが無い点。

11次元を算出しなくても物体の移動を可能とすることにより、一方通行のベクトル反射を無視して攻撃することも可能。

どういう原理で能力を発動させているかは不明。そぎいたくんは削板軍覇以上に自身の能力を理解しておらず、『とりあえず動かそうと思えば動かせる』程度。

一度に複数の物体を動かすことも可能。

また、自身の身体に触れてさえいれば、物体でなくとも移動させることが可能（電撃の槍や超電磁砲、原子崩しなど）だが、触れたと単に大ダメージになるものは結局移動させることが出来ない。

とにかくすべてにおいて異常な能力で、直接能力を使用することによる測定などでないセンサーに引っかかるレベル0無能力者認定を受けてしまうなど、分からないことが多すぎる能力。

一度に飛ばせる物体の最大飛距離は5893・349 m、最大質量は47938・6 kg

と、現在はこんな感じです。
アドバイス等ありましたら宜しくお願いします。

出会い、超電磁砲ヘレールガン（前書き）

感想、フラグ相手の投票をしてくださった皆様ありがとうございました！

現在の票は、

黒子 2 票

絹旗 2 票

初春 1 票

佐天 1 票

フレンダ 1 票

となっております。

黒子&絹旗がトップです。

まだまだ投票は受け付けておりますので、よろしくお願いいたします。

出会い、超電磁砲へレールガン

「超電磁砲^{レールガン}？」

「はい、この学園都市に8人しかいないレベル5の第3位、御坂美琴さんですよ！」

まるで自分のことのように誇らしげに胸を張りながら言う少女は初春飾利^{ジャッジメント}。風紀委員第177支部に所属する風紀委員だ。

「俺は第3位より0930事件のほうが興味あるけどなー」

と、かつたるそうに返す少年は狩初京哉。

ついこの前学園都市外からやってきた8人目にして第8位のレベル5。

「どうしてですか！？確かに分からないことだらけの事件も興味はありますけど！」

「そこで興奮するなよ……。まあ他のレベル5がどんな奴なのかは気になるけどな」

0930事件には、不可解な点がたくさんあった。外部の侵入者が犯人だとか、見たこともない天使が現れたとか、次々と人が倒れたとか、到底真実とは思えない様々な噂が飛び交っているのだ。

「まーまー、落ち着きなよ初春」

そう初春に話しかけてくるのは佐天涙子。

京哉、初春のクラスメートだ。

「なー、コイツいつもこんな感じなのか？」

「いや、いつもはもつと落ち着いてるっていうか……」

「……………御坂つてすげえな」

同性すら虜にする第3位にちよつとびつくりしてみる京哉。

初春によれば、『超電磁砲』とは最強の電気使い、エレクトロマスターコインをローレンツ力で加速させ打ち出す『超電磁砲』から『電撃の槍』『砂鉄剣』までとにかく応用性が半端ないらしい。

（思いつきりチートみたいな能力だな）

自分はいくまで物体の移動しかできないのに、と京哉は心の中で不満を呟いた。

「で、その第3位がどうかしたのか？」

「今日も会う約束なんですよ！御坂さんと！」

「で、どうしてそれを俺に言うのかな！？」

初春のあまりのテンションの高さにつつとおしさを隠すことさえままならなくなってきた京哉である。

「いいじゃないですか。レベル5同士、親睦を深めても」

「別にいいってのに……………」

「ああなつた初春は止まらないから」

目を輝かせる初春を見る京哉と佐天の目が温かいことに、初春は気付かない。

とある駅前の喫茶店。

京哉はガラスに顔をくっつけ、初春と佐天は目をそらしていた。

「……………なんじゃありゃあ」

「あー、なんていうか……………」

「あれが御坂さん……………です……………」

京哉の視線の先には肩まで届く短めの茶髪にヘアピンを付けている少女と、同じく茶髪ツインテールの少女が店内で大胆に抱き合っている姿があつた。

『……………！？く、黒子！離れなさい！見られてる！見られてるから！』

『お姉様、見られてるくらいで御騒ぎにならないでほしいですの〜』

「……………（どっちかわかんないけど）あれが第3位……………？」

「「残念ながら……………」」

『初春さんに佐天さん！？聞こえてるから！！』

来たのはやはり間違いだったか、と京哉は肩を落とした。

「で、そちらの殿方は誰ですの？」

「あ、ども、狩初京哉です」

「私は御坂美琴。よろしく」

「白井黒子ですの。よろしくお願いいたしますわ」

「よ、よろしくです」

“原石”という特殊能力のせいで今まで他人との関わりがほとんどなかった京哉は緊張気味に自己紹介をする。

「緊張しなくてもいいわよ。それよりなんか頼みたいんだけど」

「黒子はお姉様を注文したいですの」

「アンタは黙ってなさい」

変態がいる……

学園都市の恐ろしさを味わった京哉である。

「ふい、ふいふあいふえふふお（い、痛いですの）」

「アンタが余計なこと言うからでしょ」

黒子のほつぺをぐいぐい引っ張る美琴。

「なあ初春？この人たちはいつもこんな感じなのか？」

「まあ大抵は……」

「レベル5ってこう、もっとカッコいい人だと思ってたけどなあ……」

京哉の中のレベル5のイメージが音速で崩れていく。

「勘違いしないでね！おかしいのは黒子^{コイツ}だから！」

「はあ……」

と言われても……とため息をつくしかない京哉。

「本当にお姉様は容赦がありませんの……で、京谷くんは初春とは
どいう御関係で？」

「きよ、京谷くんですか？」

「ええ……だって、見るからに小学生じゃありませんの」

黒子はNGワードを放った。

「……………だれが」

「「「「「？」「」「」」」」

ブルブルと震えだす京哉と、それを不思議そうに覗き込む4人。

「だれが世界最小幼稚園児だあ——————！！」

「そ、そこまで言ってますんの！？」

どこぞのチビ錬金術師のようなシャウトが響く。

「とまあ普段ならこのまま大気圏までぶっ飛ばしてる所なんですけ
ど」

「い、いま怒ったのはなんだったの……」

「さ、さあ……」

が、普段通りに戻った京哉を見て美琴と佐天は顔を引きつらせる。

「は、話を戻しますね。白井さんと御坂さんは、オーバーポイント超越移動って知ってますか？」

「勿論ですの。8人目のレベル5、空間移動系能力者の頂点、1次元の算出を行わず物体を移動させる驚異の能力者、だったと思いますの」

「その超越移動がどうかしたの？」

「その超越移動が、この狩初京哉君なんですよ！」

「………は？」

美琴と黒子の目が点になる。

それも当然だろう。突如現れた8人目のレベル5が目の前にいて、ソイツは未知の能力を使つて、見た目小学生なのだから。

「だれが小学生だコラ」

訂正。ちよつと小柄な中学生。

「？ 誰と話してますの？」

「あ、いや、なんでもないですよ。ははは……」

「それで初春さん。その子が超越移動って話、本当なの？」

「ホントですよ！この目で見たんですから！」

「もー凄かったんですよ！？こんんな大きなクレーン車を、簡単に移動させちゃったんですから！」

「いやー、それほどでもありますけどー」

ここぞとばかりに京哉を褒めまくる初春と佐天。そして顔を赤くする京哉。

しかし京哉を見る黒子の目は細い。

「京谷k……狩初君は、一体どうやって物体を移動させてるんですの？」

「はい？」

黒子は真剣な顔つきで自分の疑念をぶつけるが簡単に返されてしまう。

「ですから、通常の空間移動系能力者は1次元「ベクトル」を用いて移動していて、貴方は1次元の特殊演算を行っていない。なら貴方はどうやって物体を移動させているのか、教えてほしいんです」

テレポーター
同じ空間移動系能力者として、一体どういう原理で超越移動が発動しているのか。

単純な興味だった。

だが指摘されてみれば、黒子をよく知る美琴や初春にとっては気に

なる内容でもある。

佐天は何が何だか分からないという顔をしているが。

「あー、そういうこと。えっとね……」

少し悩んだ後、京哉が出した結論は

「よくわかんね」

だった。

「いや、『わかんね』な訳ありませんの。空間移動は他の能力と比べても行つ演算による負荷が大きいのは証明されてて……」

「だから難しい話はよく分ないけど、とにかく『動け!』って思ったら動かさんの」

「なんてアバウトな……」

「それでよく物体の移動なんてできますね……」

「それはちよつと白井さんが傷ついちゃう気が……」

「うう……ありえませんが……こんな何も分かってない奴が黒子より格上だなんて……」

「え?何?俺なんかおかしいと言いました?」

美琴、初春、佐天は京哉のまさかの発言に呆れ、黒子は空間移動系能力者としてのプライドを傷つけられたのか、その場で体育座りに

なっ
てし
まう。

強盗、蛋白爆破ヘプロテインボンバー

狩初京哉、御坂美琴、白井黒子、初春飾利、佐天涙子も5人は手を頭につけていた。

なぜこうなったかという強盗に遭遇したからである。

「……めんどくさいな。あんなのさっさと倒しちゃえばいいじゃないですか。こっちにやレベル5が二人もいるんスからあ」

「だ、ダメですよ。人質が取られてるのに！」

京谷はさっさと倒して終わらせるべきだというが、初春は人質に危害が及ぶことを危惧して京谷を引き留める。

「初春の言うとおりですの。ここは様子を見るべきだと……」

「もーめんどくさいじゃんよー！別にいいじゃんよー！たおしちゃえばー！」

どこかの巨乳警備員のような口調で駄々をこね始める京谷。見た目小学生なだけに、違和感がまったくない。

「アンタね、人質が取られてるって分かってる？」

「分かってますよ？それが？別にアレは俺には関係ないし、どうなっても関係ないし」

「……ッ！ アンタねえ！」

美琴が京谷の胸倉を掴み上げる。

「しょうがないじゃないですか。俺は知らない人間のために死ぬなんてまっぴらゴメンですから」

「いい加減にしないよアンタ！さっきから聞いてれば……！」

「うるせえぞ！！コイツを吹っ飛ばされなくなかったら黙ってる！！」

レベル5同士が本気で闘りあおうとしているところへ強盗が人質の首を絞めて黙らせる。

美琴は舌打ちしながら京谷を元の体勢に戻るが、京谷はどちらでもいいという顔をしているだけだ。

「分かってねえようだから教えてやるぞ！！俺は触れた蛋白質を爆発させる能力……プロテインボンバー蛋白爆破を持つてんだぞ！俺が触れただけで、お前らは簡単に消し飛ぶってことを忘れるな！」

強盗の男が大声で自分の能力を豪語する。

「……なあ、つまり人質を傷つければアイツをぶっ倒してもいいんだな？」

「え？」

京谷は言つと同時にまず左右に座っていた初春と佐天の肩に触れる。ヒュンツと音とともに、二人が消え、さらにそのまま美琴と黒子の肩に触れ、二人を店の外に飛ばす。

「さて……」

京谷は両腰に手を当ててあたりを見回す。
店内にいる人間は人質さん含めても数人。

「……いけるな」

京谷はまず自分の体を犯人の真後ろに移動させる。
テレポート
そして人質に肩に触れ、

「まず一人目」

店外へ移動させる。

「んな……ッ!？」

「よつと」

そのままの体勢から犯人のがら空きになった懷に一発パンチをお見舞いしてやる。

中学生程度の腕力でも、まったく無警戒の腹はキツイ。

相手が体勢を崩しているうちに残っている客もすべて店外へ移動させる。

犯人がなんとか立ち上げられるようになったころには、店の中には京谷と犯人しかいなかった。

「このガキ……！空間移動系能力者か……！」
テレポーター

「そ。運がないねアンタ。どういうつもりか知らないけど、一大決心して狙った店にいるのが超能力者^{レベル5}。運がないってか不幸ってか」

「レ、レベル5だと……!?まさか、超越移動^{オーバーポイント}か……!？」

京谷は100万ドルの笑顔で

「そゆこと。運のない強盗さん」

姿を消した。

「……！？ 逃げやがっ……がっ!？」

「んな訳ねえじゃん。せつかくチカラを試す相手ができたんだ。いろいろ実験させてもらっぜ」

相手の背後に移動し、後ろから足払いをかけて倒し、上から覗き込む。

京谷はそのまま厨房まで歩いていく。

「ふむふむ……。こんないいかも」

そこで何かを吟味したかと思うと……手に持っていたフォークをどこかへ移動させた。

「があああああああああああああ!？」

同時に強盗犯の悲鳴が響く。

強盗の左腕を、フォークが貫通していた。

「痛いだろ？ま、アンタも高くてせいぜい大能力者^{レベル4}なんだろうしさ、ただのレベル4の強盗^{レベル5}如きが、超能力者に勝てるわけないじゃん」

痛みで聞こえてないかな？と言いながらさらに数本のフォークやナイフを手取る。

「……………!!」
「よっと」

ヒュンツと音を立ててそれらは消え、今度は強盗犯の背中とわき腹に突き刺さった。

「ぎゃあああああああああああ!!!!」

「お、まだ死なないか。……えっと、これでいいかな？」

今度は厨房にあった大ぶりのリンゴを手に取り、

「リンゴで死ぬ気分をご堪能ください」

それを頭の中にテレポートさせた。

強盗事件の発生から数十分後、アンチスキル警備員が突入した時には中には人間は一人もおらず。そこにあるのは人間だったものだけだった。

「……酷いじゃんよ。どうしてここまで残酷に殺すことができるじゃん」

警備員の一人、黄泉川愛穂は頭部を内側から破裂させられた死体を見ていた。

黄泉川は破裂した頭部と思われる（損傷があまりにも酷く原形をとどめていない）の中心に落ちている赤黒くなったりリンゴを見つけた。

「頭の中にリンゴをレポートさせたのか。やることが残酷すぎるじゃんよ」

「黄泉川さん、ジャッジメント風紀委員の方が」

部下に呼ばれ、店の外に出て行く。

学園都市に所属する教師で構成されるアンチスキル警備員と違い、ジャッジメント風紀委員は学生による治安維持組織だ。

あれは子供には少々刺激が強すぎる。

「黄泉川愛穂じゃん。よろしく」

「風紀委員第177支部所属の白井黒子ですの。以後、お見知りおきを」

「それで、犯人に心当たりがあるじゃん？」

「ええ……、あの状況で、能力的に考えても一番可能性が高い人物を一人、知っておりますの」

黒子は少し間をおいて、ついさっき知りあった自分より上位の空間移動系能力者の名を告げた。

「学園都市に8人しかいないレベル5の第8位……オーバーポイント超越移動、狩初
京谷ですの」

強盗、蛋白爆破へプロテインボンバー（後書き）

現在の票は、

黒子 3 票

絹旗 2 票

初春 1 票

佐天 1 票

フレンダ 1 票

黒子一歩リードです。

まだまだ投票は受け付けておりますので、よろしく願いします。

（追加設定）

通常、空間移動系能力者が同じ空間移動系能力者を移動させようとすると、お互いの能力が干渉してしまい、移動させられない。

が、京谷はなぜかこの法則を無視し、白井黒子などの空間移動系能力者を移動させることができる。

始動、暗部組織へアイテム

学園都市のとある学区のとあるファミレス。
そこには4人の少女と1人の男がいた。

「あれ？今日のシャケ弁と昨日のシャケ弁はなんか違う気がするけど。あれー？」

真昼間のファミレスで堂々とコンビニのシャケ弁を食す女は麦野沈利。

明るい色の半袖コートを着込んでいる麦野は、ウェイトレスがびくびくしながら見ていることに気づかない。

「結局さ、サバの缶詰がキてる訳よ。カレーね、カレーが最高」

麦野の隣にいる金髪碧眼の女子高生はフレンド。

一見するとかかなりの美人だが、サバの缶詰を缶切りで開けられないのか、ビニールテープのようなものを缶の周りに張ると、電気信号を取り付け爆薬で焼き切った。

こんな光景を見せられたらナンパどころか近寄ることも恐ろしい。

「香港赤龍電影カンパニーが送るC級ウルトラ問題作……様々な意味で手に汗握りそうで、逆に超気になります。要チェック、と。滝壺さんはどう思いますか？」

フレンドの向かいに座る十二歳ぐらいの少女は絹旗最愛。麦野やフレンドの無茶苦茶な奇行を気にも留めず（良識があるとか心が広いとかではなく、彼女自身も麦野たちと同じ類の変人なのだ）となり座る脱力系の少女、滝壺理后に話題を振る。

「……なんか今、超腹立たしい地の文があつた気がします」
「大丈夫だよ、きぬはた。私はそんなきぬはたを応援してる」

女の感、という奴だろうか。

妙に鋭い感覚を見せた絹旗を、滝壺は応援しているようだ。

「それで、滝壺さんは超どう思いますか？この映画」

「……南南西から信号が来てる……」

「超答えになつてない答えありますがとうございます」

彼女たちは『アイテム』。

学園都市の非公式組織。暗部に身を置く彼女たちの仕事は、学園都市のトップ『統括理事会』を含む『上層部』の暴走を止めること。そこには『アイテム』も含まれ、また彼女たち以外の『暗部小組織』も含まれる。

彼女たちと行動を共にしている男、浜面仕上は『アイテム』ではない。

厳密には、アイテムの『正規メンバー』ではない。

アイテムの下部組織に所属する、いわゆる下っ端という奴だ。

（……にしても、女だらけの中に男が一人つてのは居心地が悪いなあーあ、アイテムに男入らねえかな）

傍から見れば、浜面のハーレム。非常にうらやましく見えるのだが、彼女たちは学園都市の暗部に身を置くいわば『殺し屋』にも等しい存在。

並の女よりもはるかに高い戦闘能力を誇るし、性格的にも癖があり

すぎる連中だ。

ただの無能力者の浜面が行動を共にするには、ちょっと危険すぎる人たちである。

「それでさー、この前も言ったでしょ。第8位」

麦野がシャケ弁をもぐもぐ食べながら第8位のレベル5の話題を持ち出す。

アイテムの話題は、ここ最近第8位で持ちきりだった。

「オーバーボイント超越移動、狩初京谷。一昨日、喫茶店の押し入った強盗を超殺したって噂ですけど、本当ですかね」

「大丈夫、私はそんなかりそめを応援してる」

「結局、滝壺って最近それしか言っていない気がするわけよ」

「お前ら話題がそれまくってるぞ」

話題が京谷から滝壺の台詞に移ったところで浜面が元の話題に戻る。そんなアイテムの面々を見て麦野はため息をつきながら続ける。

「滝壺の口調なんてどうでもいいから。さっき絹旗が言ったけど、もし強盗を殺したってのが本当ならこれはチャンスね」

「チャンスだと？」

「そう。調べただけで、第8位の奴、幼い頃に『スクール』に両親を殺されてんの。よく分かんないけど、学園都市に來た理由も多分復讐ね」

周りに大勢の人間がいる中で、ペラペラと第8位の過去をしゃべってしまふ麦野に浜面は若干の嫌悪感を覚えた。

両親を殺された、なんて他人に知られて気持ちのいいことではないはずだ。それを簡単に突き止めてしまふアイテムの情報収集力にも、

それを調べてしまう麦野にも。

「つまり、どの道暗部に接触してくるだろうから早いうちにアイテムに超引き入れようって魂胆ですか」

「そうゆつこと。じゃあ浜面。とりあえず、アシ確保」

「へいへい」

浜面は麦野に言われるままにファミレスを出ていく。

こういった雑用は彼の仕事なのだ。

「麦野」

「何よフレンド」

「もし断られたら、麦野はどうするつもりなわけよ？」

「そんなの超決まってるますね。麦野のことだから、他の暗部組織に取り込まれる前に引き入れられなかったら殺すでしょうね。超間違いない」

「絹旗、アンター回死んどく？」

「超お断りです。それにこんなところでメンバーを減らすわけにも行かないでしょう？」

「ま、そうね」

「結局、麦野ってときどき冗談に聞こえない冗談言うから怖いわけよ」

「私今まで冗談言ったことないけど」

「え……？じゃあ昨日『次仕事ミスったら殺す』っていうのは……」

「？」

「勿論、本気^{マジ}」

「……………」

「大丈夫だよ、フレンド。私はそんなフレンドを応援してる」

アイテムの雑談はかなり物騒だった。

こつこつ連中と一緒にいる浜面仕上は、本当に不憫な男である。

始動、暗部組織へアイテム（後書き）

アンケートのご協力をしてくださった皆様、ありがとうございます！
現在の票は、

絹旗 4 票

黒子 3 票

初春 1 票

佐天 1 票

フレンダ 1 票

です。絹旗トップ！

アンケートですが、21日の0時を締め切りとさせていただきます。

では次回もよろしくお願いいたします！

以下戯言

書くなら絹旗フラグが一番楽でいいなあ
……

来訪、絹旗最愛へオフェンスアーマー（前書き）

フラグ相手の投票をしてくださった皆様、ご協力ありがとうございました！

結果は

絹旗 7 票

黒子 3 票

初春 1 票

佐天 1 票

フレンジ 1 票

最後の最後で絹旗ぶっちぎり。

というわけでオリキャラのCPは絹旗最愛に正式決定しました。
アンケートのご協力ありがとうございました！

来訪、絹旗最愛へオフェンスアーマー

とある喫茶店の強盗が殺された事件から土日を挟んで月曜。
狩初京谷は自宅にいた。

学園都市の学生にしては珍しく、学校の寮に入らず手頃なマンションに住んでいた。

超能力者認定を受けてからは、奨学金もたっぷり溜まり、生活費には困っていない。ちなみに時計は午後の3時を指す。つまり彼は学校をさぼっているわけだ。

理由は簡単。クラスメートの初春に例の事件のことを聞かれたくないからである。

京谷は最初、レベル5なら学園都市のトップが権力を行使して捕まるのを防ごうとしてくるかと思っていたが、どうやらそういうわけではないらしい。

昨日も買い物帰りに警備員に捕まりそうになった。
アンチスキル

どうやら自分が犯人であることはすでにバレバらしい。

「……めんどくせえな」

京谷自身、目的があつて学園都市に来たのである。その目的とは、警備員に捕まることではない。

学園都市の暗部の、できれば『スクール』といち早く接触したいのだ。

「……待ってるよ、翼の男。必ず俺がぶち殺す」

超能力の類なのだろう。その男は背中から6枚の白い翼を生やし、

一瞬で京谷の両親を殺した。

京谷が小学校に上がって間もない頃の話である。

分かっていることと言えば、その能力者が学園都市の暗部組織『スクール』のメンバーであるということだけ。
それ以上は何も知らなかった。

「……さて、これからどうするか。気長に待つしかねえかな……」

（簡単に人を殺すレベル5が居るんだぞ。さつさと接触してこいよ『スクール』）

スクールに限らず、暗部の人間が接触してくるのを、京谷は窓の外を眺めながら待っていた。

初春飾利は午後の授業を受けながら、自分の右斜め前の空いた席を見ていた。

先週末にはいた人間が、今はいない。

（白井さんも御坂さんも、佐天さんも狩初君を犯人のように……）。

狩初君はそんなことしないのに……)

初春の言い分は論理的じゃない。

出会って数日の人間を、どこまで理解しているかもわからないのに、人を殺すか殺さないかなどという物が分かるわけがない。

(狩初君……明日は来るかな……)

明日あったら話を聞こう、と初春はとりあえず授業に意識を集中させた。

「どうして私なのか、いまだに超納得ができません」

絹旗最愛は愚痴をこぼした。

第8位のレベル5、狩初京谷を『アイテム』に引き入れるために彼女は京谷が住むマンションへと足を運んだ。

「だいじょうぶだよ、きぬはた。私はそんなきぬはたを応援してる」

共に行動しているのは滝壺理后。

絹旗と同じく『アイテム』のメンバーだ。どうやら

「滝壺さんもそう思いませんか？この人選じゃ、最悪二人とも超殺されて終わりそうですね」

『アイテム』のリーダー、麦野沈利曰く、『年の近い絹旗と人畜無害そうな滝壺なら相手も油断する』とのこと。

んなわけねえだろバカなどと言ってしまえばその瞬間人生が終わるので黙っておいた。

「だいじょうぶ。そういうときはきぬはたの出番だから」

「私と空間移動系能力者として^{テレポーター}超絶望的に相性が悪いですから」

「だいじょうぶ。わたしはそんなきぬはたを応援してる」

と、漫才をしながら気がつけば^{オーバーポイント}超越移動の部屋の前まで来ていた。

「まあどっかで麦野とフレンドが見てるでしょうし、いざとなったら麦野に任せますから」

レベル5の処理はレベル5に任せることにして、絹旗はインターホンを押した。

「どうやら中にいるようで、中から『今出ます』と声が聞こえてきた。」

（不用心ですね。こんなのが暗部で通用するとは超思えません）

「きぬはた」

「超分かってます」

絹旗をドアが開かれるよりも早くドアに手を当て、鉄製の重いドアを吹き飛ばした。

彼女の能力、オフエンスターマー室素装甲による現象だ。

室素を操る能力者である絹旗は、能力を行使することによって、自動車を簡単に持ち上げることすらもできる。操れる室素の範囲は手のひらから数センチ程度なのだが、ただドアを吹き飛ばすだけならそれで十分だった。

「よう。面白えことしてんじゃないか」

後方から声が聞こえてくる。

と同時にコンクリートの塊が絹旗の頭上にテレポートし、絹旗はそれを室素装甲で防御する。

「……ういてる」

「……超浮いてますね」

第8位、オーバーポイント超越移動、狩初京谷は宙に浮いていた。

「いや、浮いてるわけじゃないんだけど」

京谷の言うとおり、マンションの壁に部屋の床を喰いこませてあるだけなのだ。

そのおかげで足場ができ、絹旗や滝壺からの視点だと浮いているように見えるだけである。

「アンタ達何者？いきなり人の家のドアぶっ壊すとか、まともな人

「間じゃないよな？」

「私が超説明します。狩初京谷、『アイテム』に入りなさい」

襲来、垣根帝督へダークマター

「私が超説明します。狩初京谷、『アイテム』に入りなさい」

学園都市の暗部組織の一つ、『アイテム』の構成員、絹旗最愛はそう告げた。

それに対し、京谷はなにも返事をしない。

「…超説明を省きすぎました。『アイテム』というのは、この学園都市の暗部組織の一つです」

『暗部』という単語に京谷がわずかに反応する。

「……面白い勧誘だな。宗教なら間に合ってる」

「超話を聞いてなかったようなのでもう一度説明します。『アイテム』というのは……」

「わぁーったわぁーった。もう十分分かりましたよ」

「……超バカにされてる気がします」

「大丈夫だよ、きぬはた。私はそんなきぬはたを応援してる」

絹旗は京谷の態度に青筋を立てるが京谷は気にも留めない。
というか、絹旗と滝壺を見ていない

（『アイテム』か……。『スクール』と同じようなモンなんだろうな、きつと。できればスクールの方がありがたかったが、まあどっ

ちにしろ同じか。暗部に入れば、一応目的達成には近づけるしな)

理想形は『スクール』だったが、『アイテム』だろうと暗部組織の一つであることには変わらない。暗部に所属していれば、いつか同じ暗部組織の『スクール』と衝突する可能性はあるし、『スクール』のメンバーを殺すという大義名分もできる。

代わりに相手を殺すチャンスをつかがうことができなくなるというデメリット付きだが。

「まあ、多分選択肢はないんだろ？」

「超よく分かってるじゃないですか。これは命令です。狩初京谷、『アイテム』に入りなさい」

自分たちが暗部の人間であると明かした以上、京谷が断ればこの二人は即座に京谷を殺しにかかってくるだろう。

片方はドアを吹き飛ばしたりしていたから、風力使いか、または念^{テレ}動力の系統の能力者だろう。

片方の能力が分かっているということは、逆にいえばもう片方は分からないということでもある。

というかこの二人のどちらかが『アイテム』に所属する超能力者^{レベル5}とに限らない。

片方はドアを吹き飛ばしたが、別にそれが能力の限界だとは誰も言っていないからだ。

「んー、分かった。それじゃあ……」

よろしく、と言おうとしたところで、京谷は瞬時にレポートし、絹旗は滝壺を抱えてその場を離れた。

何か光線のようなものが、3人を同時に攻撃してきたからである。

京谷がレポートした先は、同じマンションの屋上。

「よう。お前が新入りのレベル5でいいんだな？」

「やっと見つけたぞ……！」

京谷とアイテムからの使者を襲撃した男は、背中に6枚の純白の翼を生やしていた。

『ダークマター
未元物質』 垣根帝督。

学園都市の第2位と第8位の、復習する側とされる側の、あまりにも早い衝突。

襲来、垣根帝督へダークマター（後書き）

次回、京谷vs垣根……になるといいなあ。

妥協、超越移動へカリソメキョウヤ

「お前が新入りの超能力者レベル5で良いんだな？」

「翼野郎……！何の用だよ……！」

京谷は威嚇しながら垣根と距離をとる。

垣根のような能力自体に攻撃力があるのとは違い、京谷の超越移動オーバーボイントそのものには物理的な攻撃力はないからだ。

何かしらのテレポートさせる物体がなければ、京谷の戦闘能力はさして高いものではなくなってしまう。

「ああ、お前が強盗殺しって聞いてな、ちょうどいいから『スクール』に勧誘しようと思ってたが、『アイテム』に先を越されたからな」

「それが俺を殺そうとするのとどういう関係があんだよ」

「どうやらそっちの交渉は終わっちゃった見てえだったからな。『スクール』に引き込むのも面倒だし、ここで殺すぞ」

思えば『アイテム』にも似たようなことを言われた気がする。どうやら暗部の連中は、京谷にある程度の情報を与え、それで引き込むことができればその場で始末するという方針らしい。だが京谷は、

「そうかよ。出来るもんならやってみな」

垣根を挑発した。

京谷は垣根帝督という人間が、学園都市第2位のレベル5だということを知らない。

それでも、垣根の立ち振る舞いから（おそらくだが）自分と同じレベル5の能力者であることは理解できていた。

もしレベル5なら、間違いなく自分より格上。まともにぶつかって勝てる相手とは思えない。

それが、超越移動が未元物質と対峙して感じた現実。
かりそめきょうや かきねていよく

突如、垣根帝督をエアコンの室外機が襲った。

厳密には、室外機を投げつけた絹旗最愛だ。

「……痛えな。そしてムカついた。まず第8位を殺すつもりだったが、まずはテメエから殺す。『アイテム』なら手加減してやる必要もないしな」

「出来るものなら超やってみてくださいよ。狩初京谷は私たち『アイテム』のメンバーです。彼の教育も、超私の仕事なんですよ」

「いや、勝手に決めるな」

最初から入るつもりだったが。

「テメエは確か、絹旗だったか？大能力者如きが超能力者に勝てる
レベル4
と思ってるのか？」
レベル5

「間違いなく超勝てないでしょうね。だから私は超死んでも狩初京谷が逃げ切る時間を稼ぐ必要があるんです」

「いや、俺テレポーター空間移動系能力者なんですけど」

なんか会話に乗り切れてない気がする京谷。

絹旗がここまで言っているのだから、一緒にいたピンクジャージの少女はとくに逃がしたのだろうか。

確かにあれは戦闘には向いてなさそうだったが。

「まあいいぜ。殺してやるからとつと死ねよ」

「ただでやられてやるつもりは超ありません。せめて右腕くらいは貰いますから」

さつき京谷が言った通り、京谷は空間移動テレポートで逃げればいいだけの話なのだ。京谷の超越移動オーバーポイントの射程範囲はおよそ5 km。いくら垣根でも追いつける距離ではない。

それができない、と絹旗最愛は目で言っていた。

「いつとくがな、空間移動テレポートして逃げようなんて思わない方がいいぜ」

「何だと？」

「お前は知らないだろうがな、俺の能力は『未元物質』ダークマター。この世に存在しない素粒子を生み出す能力だ」

『未元物質』。垣根帝督が所有する学園都市第2位の能力。

「理論上は存在するはず」とか「存在するかもしれない」のような陳腐なものではなく、本当に存在しない素粒子を生み出す能力。

それは、この世に存在しないがゆえにこの世の物理法則には従わず、独自の法則を持って存在する。

「それが俺の『未元物質』だ」

「……それで俺は空間移動できないとでも？」
テレポート

「ああ。この世界はたった一つの異物でがらりと変わっちまう。これが『未元物質』。ここはテメエの知る世界じゃねえんだよ」

垣根は少しずつ、京谷と絹旗との間合いを詰めていく。

『未元物質』が混じった世界では、京谷の能力は今までどおりには働かない。

それが垣根帝督が狩初京谷を逃がさない自信だった。

「……上等だ」

「あ？」

「こい。えっと……超超うるさいの」

「超超うるさいのって……」

京谷はがしっ、と最愛の腕をつかむと、垣根を見て

「……次、会うときは殺すからな」

そう言い残し、『未元物質』による危険も顧みずテレポートした。

「あ……、ハッターってばれたか？」

その場にポツリと残された垣根は、京谷の鋭さに頭をポリポリと書くのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4728y/>

とある科学の超越移動《オーバーポイント》

2011年11月27日23時03分発行